

ジッドのポール・フォール宛未刊書簡

吉井, 亮雄
九州大学文学部

<https://doi.org/10.15017/10020>

出版情報 : Stella. 18, pp.245-250, 1999-06-10. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン :
権利関係 :



ジッドのポール・フォール宛未刊書簡

吉井 亮 雄

実証的な文学研究において網羅性の追求は必須の条件である。書簡集の編纂や校訂版の作成など一次資料を対象とする分野ではとりわけそうであって、調査・探索に遺漏のないことが強く求められる。だが言うは易く行うは難し、実際には研究の成果を世に問うたあとになって新たな資料の出現を見るのもけっして珍しいことではない。いやそれどころか、かかる不運を免れる業績のほうがむしろ稀であるといってよいだろう。筆者が1992年に公刊した『放蕩息子の帰宅』校訂版の場合も幸福な例外とはなりえず、修正・加筆を要する点をすでにいくつか生じている¹⁾。これについては、さらに情報をあつめたうえで、いずれ仏語版補遺として公表の予定であるが、ひとまず本稿では最近現存が確認されたジッドの未刊書簡1通を若干の説明を付して紹介しておきたい。

このたび見つかったのは『放蕩息子の帰宅』の雑誌初出テキスト（およびその別刷からなる非売の初版）にかんする書簡である。名宛人は、作品を掲載した季刊芸誌「詩と散文」の主宰者ポール・フォール。連作『フランスのパラード』で名を馳せたあの「詩王」フォールである。黒色インクによる文字列が二折用紙1葉の第3面までを埋めるが、その内容は初校を返却し再校を請うというもので、もっぱら組版上の変更が話題となっている。こういったところをとりあえずの前置きとして、さっそく全文を訳出することにしよう（仏語原文は本稿末尾に掲載）――

ポール・フォール様

再校をお願いしてもよろしいでしょうか。お願いできますよね、あなたも私と同じようにテキストが非の打ちどころなく正確であることを望んでおられるのですから。ということで、修正をほどこした初校を同封いたします。

作品名が各対話の小題と完全に区別がつくように活字を大きなものに変える必要があるだろうと思います。

また対話の小題（「放蕩息子」「父の叱責」「兄の叱責」など）のほうは、大きな活字を使って字間も今ほど広くないほうがおそらく望ましいでしょう。最後に、章と章とのあいだをもう少し詰めるほうが多分よいのではないかと。それらが別々の話ではなくひと続きであるのが一瞥して分かることが大事なのです。

つぎの点はいかがお考えになるでしょうか。小題を右詰め（どれも欄外にまで出すのではなく、本文行末にそろえて）にするとしたら。その場合には文字をかなり大きなものに変え、章と章との間隔をさらにもっと狭めなければならないでしょうが、でもそうすればとてもよい、充分に条件を満たすものになるような気がします。

これについては、あなたのほうでよろしくお取りはからいください。私が提案しました組版についても同様にご尽力をいただきたく。

さようなら。親愛の念をこめて、あなたの

アンドレ・ジッド

用紙第1面の右上端には、差出人・名宛人のいずれとも異なる第3者の筆跡で「1909」と記されているが、これはあきらかに後年の書き込みで、雑誌初出と「ロクシダン文庫」刊行の第2版（1909年付、出来は1910年）とを混同したままたくの誤謬。実際には書簡じたいに日付はなく、また封筒も残っていない。このため正確な日にちを特定することは難しいが、もっとも可能性の高いのは1907年の3月29日ないし30日である。関連情報の補足もかねて日付推定の根拠をごく簡略に述べよう²⁾。

ジッドはこの年の3月25日に友人アルチュール・フォンテーヌに「詩と散文」誌の初校を送る。作品を貴兄に捧げたいのだが冒頭に献辞を入れてもさしつかえないか、そう問うためであった。これにたいしフォンテーヌは、28日朝に出された気送管速達^フで献辞の申し出を快諾し、校正刷は翌朝10時にパリ・オートゥイユのジッド宅に持参すると告げている。いっぽうジッド自身のその後の行動については、30日に首都を離れ遠くキュヴェルヴィルまで赴いたことが同日のマルク・ド・ラニュックス宛書簡によって分かっている。しばらくの予定で妻マドレーヌとともに春の恒例だったバラの剪定にでかけたのである。ジッドがキュヴェルヴィルから校正刷を返送した蓋然性もむろん否定はできないが、現実にはいささか採りにくい。以上を考えあわせフォール宛書簡の執筆日として29日ないし30日を最有力とするわけである。ジッドが4月1日にはベルギーの作家クリスチアン・ベックに宛てて作品完成の旨を報告していることも、われわれの推定を補強するのではあるまいか。いずれにせよ

「1907年の3月末、あるいは以後さほど日をおくことなく」といくらか幅をもたせるならば、日付にかんして誤りをおかす虞はいっさいなくなる³⁾。

記述内容の補説に移ろう。まず初校については、二折用紙7葉、全26頁からなる揃い1部がカトリーヌ・ジッド女史宅に現蔵されている。作家が女史の祖母マリア・ヴァン・リセルベルグに贈っていたもので、上記の事情を映してこの段階ではまだフォンテーヌへの献辞は活字に組まれていない。また大半は誤植の訂正や文体上の微細な変更だが、いずれの頁にもジッドの手が入る。するとこの揃いこそがフォールに返送された現物なのだろうか。答は否といわざるをえない。その理由は、修正済みの校正刷は著者に返却されないのが通例であること、ジッド自身による組版上の指示はあるものの印刷所側の受領印や朱字記入がいっさいないこと、「非の打ちどころのない正確さ」が期されていたにもかかわらず誤植がいくつか未修正のまま残ること、そしてとりわけフォンテーヌへの献辞が自筆でも書き込まれていないこと、である。すでにタイプ稿の段階では作業の迅速化をはかって数部のコピーが作られていたが、初校についても同様の目的で再校作成用とは別の揃いがジッドの手元に残されていた、そう考えるほうがはるかに無理がない。現存初校がフォンテーヌとのやりとりに使われたものとは断言できないが——しかしそうであった可能性はかなり高い——、少なくともフォール宛書簡に同封されたものでないことだけは確実であろう。

再校にかんしては今のところ未発見だが、書簡の要求どおり作成されたことが分かっている。ただし出来は予定を大幅に遅れ、ジッドがこれを受けとったのは5月下旬のことであった。そのときの修正がごく少数にとどまったことは、現存初校の最終状態と雑誌掲載テキストとを校合することで容易に確認できる。またジッドがフォールに書き送った提案についても、各小題が右詰めではなく初校どおり左詰めに配されたのを除けば、最終的にはすべてがそのまま容れられている。ちなみに、「詩と散文」をはじめ当時の文芸誌では著者校正は初校のみというのが一般的であった。にもかかわらずジッドが再校を望んで入念を期したのは豪華紙使用の別刷が計画されていたことも少なからず関係していよう。彼がマラルメの「パージュ＝エクラン」の考えに強く影響され自作品の印刷形態に細心の注意をはらったことはよく知られるが、この傾向は経費面の制約が緩やかな少数限定の私家版や初版の場合にはとりわけ顕著で

LE RETOUR DE L'ENFANT PRODIGUE

à Arbur Fontaine,

J'ai peint ici, pour ma secrète joie, comme on faisait dans les anciens triptyques, la parabole que Notre Seigneur Jésus-Christ nous conta. Laissant épars et confondue la double inspiration qui m'anime je ne cherche à prouver la victoire sur moi d'aucun dieu — ni la mienne. Peut-être cependant, si le lecteur exige de moi quelque piété, ne la chercherait-il pas en vain dans ma peinture, où, comme un donateur dans le coin du tableau, je me suis mis à genoux, faisant pendant au fils prodigue, à la fois comme lui souriant et le visage trempé de larmes.

L'ENFANT PRODIGUE

Lorsqu'après une longue absence, fatigué de sa fantaisie et comme désépris de lui-même, l'enfant prodigue, du fond de ce dénûment qu'il cherchait, songe au visage de son père, à cette chambre point étroite où sa mère au-dessus de son lit se penchait, à ce jardin abreuvé d'eau courante, mais clos et d'où toujours il

あって、活字や用紙の選定にはじまり、組版・印刷・製本にかかわる一切がきびしく検討吟味された。ジッドにとってこれらマテリアルな諸々は単なる道具立てなどではけっしてなく、作品の一部ともいえる大切な要素だったのである。

最後にもう一点。ジッドは「各章が別々の話ではなくひと続きであるのが一瞥して分かる」ことをとくに強く求めている。この指示が5つの章だけではなく、冒頭の段落（以下「序言」と仮称）についても同様に適用されるべきものであったことは、現存初校への書き込みによって確認できる。むろん印刷テキストでも、序言と後続の章「放蕩息子」とのあいだは以下各章の連結部とまったく同じ体裁で組まれている（左頁図版）。これは『放蕩息子の帰宅』の解釈に深くかかわることだ。すなわち序言はあくまでも虚構内の「私」の発話として提示されなければならないのである。そうであってこそ、後に登場するもうひとつの「私」とのあいだに語りの二重性が成立するのであり、ジッドの意図した「精神の沈黙と躍動の対話」もはじめて十全のものとなるからだ。今日の研究者でこの点を誤解するものはまずいまいが、作家の懸念が故なきものでなかったことは1930年代前半にドイツで作られた仏語教科書版の実例を示せば充分であろう。同版の刊行者は序言をジッド自身の前書きと見なし、その直後に解題を挿入するという致命的な誤りをおかしているのである⁴⁾。付言すれば、自筆稿・初校・初版のどの段階においても序言と後続部分とのあいだには頁変えがおこなわれていない（タイプ稿では作品名と序言で1葉の全面を埋める）。また序言が斜字体で印刷されるのも、ガリマール版全集など、他作品の印刷形態に影響されざるをえない場合だけで、単行各版ではすべて後続部分と同一の活字で組まれる。いずれも序言の虚構性を視覚的に保証せんがためである。

註

- 1) André GIDE, *Le Retour de l'Enfant prodigue*. Édition critique établie et présentée par Akio YOSHII. Fukuoka : Presses Universitaires du Kyushu, 1992, 265 pp.
- 2) 以下2段落の記述はおおむね前掲拙著が活字化した書簡や自筆稿類の情報による。

したがって詳細は同書（特に 27-30 頁および 114-117 頁）を参照されたい。

- 3) ここで「3月29日以後」と起点をあえて特定しないのは、次の段落で述べるように初校が複数揃い存在したことから、ジッドがフォンテーヌの同意を得た「3月28日」当日の可能性を否定しきれないためである。
- 4) Voir André GIDE, *Le Retour de l'Enfant prodigue*, éd. Albert G. PFAU, Leipzig: Verlag von Quelle & Meyer, coll. «Bibliothèque Française», s. d. [1932], 40 pp. ジッドがこの教科書版の作成に関与していないことは言うまでもない。

* * *

Lettre inédite d'André Gide à Paul Fort

[fin mars ou début avril 1907]

Mon cher Paul Fort

Puis-je espérer des secondes épreuves ? Oui, n'est-ce pas, car vous tenez comme moi à ce que le texte soit parfaitement correct. Voici donc les premières, corrigées.

Je crois qu'il y aurait à :

grossir les caractères du titre général – de manière à le différencier complètement des petits titres de dialogues.

Et pour ceux-ci (*Enfant prodigue, Réprimande du Père, Réprimande du fils aîné*, etc.) je les aurais peut-être souhaités en caractères à la fois grands et moins séparés. – Enfin, peut-être (?) un peu moins de séparation entre les ... chapitres. Il importe qu'on sente du premier coup d'œil que ce ne sont pas des contes séparés – mais *une suite*.

Qu'auriez-vous pensé de ceci : mettre ces petits titres complètement sur la droite (*non pas* en marge pour tous, mais dans l'alignement du texte). Et dans ce cas il y faudrait des lettres passablement plus grandes – et *beaucoup* moins d'intervalle de chapitre à chapitre. Mais il me semble que ce serait très bien – très ce qu'il faut.

Enfin, vous arrangerez cela pour le mieux, cher ami. Tout de même tâchez d'obtenir cette disposition que je vous propose.

Au revoir. Je suis affectueusement

votre

André Gide